

青年期のコミュニティ福祉学部での9年を振り返って

平野 方紹

(元福祉学科教員)

年の区切りとしてよく知られているのは、世紀 Century や千年紀 Millennium です。これらは人の生の長さをこえ、悠久の時の流れを感じさせてくれます。その一方で十年紀 Decade という区切りもあります。こちらは、ほとんどの人にとって「人生の切片」です。日常でも「十年一昔」と言いますから、この10年とは、社会にとっても人にとっても変化・推移の目安なのでしょう。

10年前（2011年）は確かに画期でした。2011年3月の東日本大震災は、それまでの日常と風景に「それ以前」と「それ以後」という大きな断層をもたらしました。この年、多くの大学で卒業式や入学式が取りやめになり、授業開始が延期されるなど、それまでのキャンパスの日常が「当たり前」でないことが突きつけられました。

私が、本学部に赴任したのは、翌2012年4月です。入学式があり、キャンパスには新入生歓迎の明るい声が響いていました。まだ被災地は深刻な状況で、学部の被災地支援に多くの学生や教職員が取り組んでいましたが、この1年で「当たり前」の日常が確実に戻っていると実感できました。

その2011年から10年経った2021年、前年（2020年）新春からのコロナ感染は、やはりキャンパスから「当たり前」の日常を奪い、閉塞的な生活が強いられたまま過ぎようとしています。ワクチン接種の広がりなどはあるものの、まだ出口の見えない日々が続いています。

これは偶然なのでしょうが、この10年は、当たり前の日常が喪われ、それを取り戻し、それがまた喪われる十年紀となりました。そして、この十年紀のほとんどが、私の立教での教育・研究の日々となりました。

定年退職は年齢で決まるので、準備も心構えもできます。しかし、社会が、そして大学がこんな事態になるとは思ってもいませんでしたし、予測もできませんでした。そんなことで、思い描いていた「有終の美」を飾ることはできませんでしたが、奉職した9年の日々を振り返ると、それは忘れがたく、代えがたい十年紀であったと思っています。

コミュニティ福祉学部は、1998年の創設から23年、人ならまだ青年期の学部です。私はその学部の成長期に関わりましたが、そんな成長期だからなのでしょう、教職員だけでなく、学生・院生も一緒になって、手探りながらみんなで自分たちの学部を作ろうと試行錯誤してきた、宝物のような日々でした。よく、「コミュニティ福祉学部は教職員と学生の距離が近い」と他学部から羨ましがられますが、それは「たまたま」でも「なんとなく」でもなく、こうした一緒に学部を創っているという「風土」が醸し出していると肌で感じています。

人の成長期には豊かな実りもあれば挫折や試練もあるように、学部にも様々なことがありました。

今、学部名にある「コミュニティ」は深刻な状況にあり、学部の理念である福祉や健康が脅かされています。この厳しい時期を乗り越えるには、教職員、学生、院生、OB/OGなどみんなが語り合い、力を蓄え、顔を上げる元気を持てる、そんな場が必要です。

教える者・教わる者、先輩・後輩という垂直関係ではなく、「よりよい明日を創る」という共通の想いを持った同志的な水平関係での仲間とそのコミュニティという、この「まなびあい」の場は、この学部の軌跡の中から生まれ、その風土の継承者だと思っています。今後ますますのご発展を心から願っております。

1992年の阪神・淡路大震災の話です。東京都内のある教会の牧師が被災地に支援に行くために、支援物資としてろうそくを買い集めました。周囲の人は「ろうそくよりも食料や衣料品でしょう」「現金が効果的だよ」などと言いましたが、その牧師はたくさんのろうそくをもって被災地に向かいました。

まだ停電したままの避難所で、漆黒の闇夜に灯ったろうそくは小さな火ですが、その暖かな火に多くの人が励まされました。ろうそくの灯は小さく、直ぐに吹き消されるほど弱いものです。明るい電気の下ではほとんど目立たない存在ですが、そのささやかな灯は、闇が深ければ深いほど明るく励ましてくれました。

今、多くの人々がうつむいたままの気持ちで日々を過ごしています。それだけに人々を優しく照らしてくれる、ささやかなろうそくの灯が、あちこちでたくさん灯されることを願っています。

まなびあいの場が、そんな心のろうそくを灯し、それを増やし広げ、これからの新たな十年紀が、当たり前前の日常を取り戻し、人々の平穏な日々となるために寄与していただくことを願っています。